

夏目漱石辞典

古川 久 編

東京堂出版

編者略歴

明治四十二年（一九〇九）、名古屋生。

東北大学法文学部卒。

現在、武蔵野女子大学教授。

編著書——『漱石の書簡』『漱石と植物』『夏目漱石』『漱石全集総索引』

『狂言辞典・語彙編』『狂言辞典・事項編』『狂言総覧』『狂言の世界』能

の世界』『明治能楽史序説』『世阿弥・芭蕉・馬琴』等。

現住所——（〒180）東京都武蔵野市御

殿山二—三—五。

夏目漱石辞典

定価二〇〇〇円

昭和五七年一月一日 初版印刷
昭和五七年一月二五日 初版発行

編者 古川 久

発行者 岩出 貞夫

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

発行者 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三ノ七（〒100）

電話 東京 三三・二七四 振替 東京 三三

序

昭和三十一年に岩波書店から、七回目の『漱石全集』が、新書判型で発行されることになった。これが普及版である建て前から、新仮名づかいに抛り、新字体を使つてはという案が出たのも無理はない。しかし当初から全集編集同人の一人であり、関東大震災後の三回目新版以後は、全力を注いでその完成に努めて来た小宮豊隆先生は、原典主義を堅持して譲らず、代りに若い読者向けの注解を添えるよう提案された。

これより先の昭和一〇年に、五回目の決定版が企てられた際、総索引の作製に参加した関係から、私はその注解の編集に携わることになった。まるで雲をつかむような仕事だが、取りあえずこの総索引を頼りに、注解すべき項目を選びはじめてみた。しかし採否の規準がある筈もないので、なるべく拡散しないよう心がけても、項目数は増すばかりとなった。

そのうち発行されはじめると、数次の刊行で練り上げてある本文は、容赦なく組み上げられて行く。月二冊の配本に間に合うよう、辞句を選んでは及ぶ限り調べ、不明の分はそれぞれの分野の先覚に教えを乞い、どうにかまとめて小宮先生の校閲に供える。このようにして全三十四冊が出終るまで、一年半余りを目まぐるしく過ごした。続いて不備などころの多い索引の改訂に取りかかり、長田幹雄氏と共編で固有名詞、語句・事項、作中人名、作品の四部から成るものを作り直した。

この間に未発表書簡をはじめ新資料の発見が相次ぎ、かなりの分量に達した。そこで昭和五三年から、予約制によらぬ普及版が企てられ、これまでの注解を見直して、最終冊「補遺」に新しく加える運びとなった。

漱石辞典の企画は小宮先生御在世中から立てられていたが、その組織は容易に定めがたく、つい延び延びになって来たところ、このたび東京堂出版より改めて勧誘を受け、やっと手を着ける決心をした。もとより注解と索引を基に、準備をはじめたものの、形式の違う作業はなかなか捗らず、項目の取捨をくり返ししながら、やっとここまで漕ぎつけたのである。

願うところは漱石の作を味わい、その人に親しむのに、必要と思われる基礎的な知識を、辞句と事項により、できるだけ客観的にまとめようと努めた点である。従っていわゆる百科辞典風に、あれこれ網羅するのではなく、また説明や評価を、表立てぬ方針を取ったつもりで、あくまで読解の参考を旨

とした。

長い年月にわたり無類な質問に応じて下さった方々をはじめ、既知未知の人々からの好意ある教示を受け、全集編集部各位の暖かい協力を心から感謝する。こうした書物の関係上、文献と同じく一々お断りする余裕がなく、また責任を転嫁するのも恐れ、お名前を省略させていただくのをお許し願いたい。終りに事の大小となく、犯している過誤に対し、大方の御叱正をお願いする。

昭和五十七年五月

古川 久

凡 例

一 本書は百科辞典風に、あれこれ網羅するのではなく、また説明や評価を、表立てぬ方針のもとに、漱石の著作を味わい、その人格に触れるのに、参考となる辞句と事項を、一括して五十音順に並べたものである。

二 辞句は作品を主とする全著作から選び、すべて出所を明記してある。事項は生涯を中心に連関する項目を選んだ。

三 項目は新かなづかいに拠る見出しを掲げ、続いて適當と思う表記を示したが、それは必ずしも漱石の用法と一致しない。

四 検索の便を考え、巻頭に「事項分類目次」を付した。

目 次

序	前付一
事項分類目次	前付七
夏目漱石辞典	一
年 譜	一八五

事項分類目次

【作品など】

長編	一一八
吾輩は猫である	一八二
虞美人草	五七
坑夫	六七
三四郎	七七
それから	一〇六
門	一七二
彼岸過迄	一四八
行人	六五
心人	六八
道草	一六六
明暗	一六九
短篇	一一五
倫敦塔	一八二

カーライル博物館	四四
幻影の盾	一六四
琴のそら音	七〇
一夜	二〇
薤露行	三七
趣味の遺伝	八七
坊つちやん	一六〇
草枕	五六
二百十日	一三六
野分	一四〇
小品	九〇
京に着ける夕	五三
文鳥	一五五
夢十夜	一七六
永日小品	二八

満韓ところへ	一六五
思ひ出す事など	三六
硝子戸の中	四四
文学論	一五五
文学評論	一五五
評論	一五〇
文芸の哲學的基礎	一五五
創作家の態度	一〇四
私の個人主義	一八三
溟虚集	一七六
鶉籠	二六
草合	五五
四篇	八四
切抜帖より	五四
社会と自分	八五
色鳥	二四
金剛草	七三
講演	六四

事項分類目次

応問	三二
談話	一一五
雜篇	七六
序文	九三
初期の文章	九二
作文	七五
英詩	二八
漢詩文	四六
木屑録	一五九
和歌	一八二
新体詩	九五
俳体詩	一四一
連句	一八一
書画	九一
日記	一三五
断片	一一五
書簡	九二

【生涯】

一〇〇

小学教育	八八
東京府第一中学校	一二六
二松学舎	一三五
成立学舎	一〇一
大学予備門	一〇七
江東義塾	六六
志望	八四
帝国大学	一二一
雅号	三九
東京専門学校	一二六
東京高等師範学校	一二六
参禅	七七
愛媛県尋常中学校	二九
第五高等学校	一〇九
結婚	六一
洋行	一七六
講師生活	六四
「ホトトギス」	一六〇
門下生	一七三
朝日新聞社	七
早稲田南町	一八三
満韓旅行	一六五

【知友】

一七

朝日文芸欄	八
大患	一〇八
博士問題	一四二
胃病	二三
死	七八
父	一一六
母	一四五
養父	一七七
姉	一〇
兄	九
嫂	一〇
妻	一二〇
子	六三

池辺三山	一七
太田達人	三三
大塚保治	三三
狩野亨吉	四二
菊池謙二郎	四八
畔柳芥舟	五九
桑原喜市	五九
斎藤阿具	七四
佐藤友熊	七六
菅 虎雄	九七
高浜虚子	一一〇
立花銑三郎	一一二
立花政樹	一一二
鳥居素川	一三〇
中村是公	一三三
正岡子規	一六二
山川信次郎	一七四
米山保三郎	一七八

【門 下】	
赤木桁平	五
芥川龍之介	五
阿部次郎	一一
安倍能成	一二
岩波茂雄	二四
内田百閒	二六
大谷繞石	三三
岡田耕三	三四
小宮豊隆	七二
坂元雪鳥	七四
鈴木三重吉	九七
寺田寅彦	一二三
中川芳太郎	一三二
中 勘助	一三二
野上豊一郎	一三八
野上弥生子	一三九
野間真綱	一四〇
野村伝四	一四〇
松根東洋城	一六三
真鍋嘉一郎	一六四
皆川正禧	一六七

森田草平	一七二
湯浅孫三郎	一七四
【同時代人】	
青木健作	四
青木 繁	四
浅井 忠	六
有島生馬	一三
泉 鏡花	一八
磯田多佳	一八
上田 敏	二五
内田魯庵	二六
大塚楠生子	三三
大町桂月	三三
小山内薫	三四
金子健二	四二
加納治五郎	四二
河東碧梧桐	四五
木下幸太郎	五一
鬼村元成	五一
	九

事項分類目次

国木田独歩	五六
桑木蔽翼	五九
小泉八雲	六三
小杉未醒	七〇
坂本四方太	七四
佐久間勉	七五
笹川臨風	七五
寒川鼠骨	七六
志賀直哉	八〇
渋川玄耳	八四
島崎藤村	八五
宗 演	一〇四
宗 活	一〇四
滝田樽陰	一一一
田山花袋	一一四
津田青楓	一二〇
徳田秋声	一二八
富沢敬道	一三〇
長塚 節	一三二
中村不折	一三三
西川一草亭	一三四
沼波瓊音	一三七

乃木希典	一三九
橋口五葉	一四三
長谷川如是閑	一四四
長谷川二葉亭	一四四
藤村 操	一五二
二葉亭四迷↓長谷川二葉亭	一五九
宝生 新	一五九
武者小路実篤	一六八
村上露月	一六九
森 鷗外	一七二
山本松之助	一七四
弓削田精一	一七五
横山大観	一七八
和辻哲郎	一八三
【古 人】	
歌 麿	二一
応 挙	三一
華 山	三九

龜田鵬斎	四三
其 一	四八
香 蔽	五二
高 泉	六六
高芙蓉	六七
寂 蔽	八五
若 冲	八六
藏 沢	一〇四
大雅堂	一〇八
大燈国師	一一〇
白 隠	一四一
芭 蕉	一四三
蕪 村	一五三
抱 一	一五八
明 月	一六九
良 寛	一八〇
【外 人】	
アディソン	九
アーノルド	一

アンドレーフ 一四
 イブセン 二三
 ヴィクトリア 二五
 ウォーズウォース 二五
 エリオット 二九
 エリザベス 二九
 エリセフ 三〇
 オイケン 三一
 王 維 三一
 王義之 三一
 オーガステイン 三四
 カーライル 四四
 カント 四七
 キップリング 五〇
 クレイグ 五八
 グレー 五八
 ケアー 六〇
 ケーベル 六二
 ゴーリキー 七二
 シェレー 七九
 邵青門 九〇
 スウィフト 九六

スウィンバーン 九七
 スコット 九七
 スターン 九八
 ステューブソン 九八
 ブーデルマン 九九
 ストリンドベルク 九九
 スペンサー 一〇〇
 ゴラ 一〇六
 ターナー 一一三
 ディケンズ 一一三
 テニソン 一二三
 デフォー 一二三
 陶淵明 一二五
 ドーデ 一二九
 ドクインセイ 一二八
 ドストエフスキー 一二九
 トルストイ 一三〇
 ニーチェ 一三五
 バーンズ 一四七
 ヘーゲル 一五六
 ベーコン 一五六
 ベルグソン 一五七

ポー 一五八
 ホイットマン 一五八
 ポーブ 一六〇
 ホーマー 一六〇
 マードック 一六三
 マラルメ 一六四
 ミルトン 一六七
 メレディス 一七〇
 ルソー 一八〇

【不分類語彙】

一二四項。前記事項分類
 と渾然五十音順配列。

夏目漱石辞典

あ

ああらものものしぬすびとよ……『ああら物々し盗

人よ……』謡曲『烏帽子折』の「あら物々しやおのれらよ、
く。先に手並は知りつらん、それにも懲りず打ち入るか」
による。▽吾輩は猫である十一「あゝら物々し盗人よ。手並は
さきにも知りつらん。これにも懲りず打ち入るかつて、ひど
い目に合せてやりまさあ」

あいのこ『合の子』①違う土地で生まれた者たちの間
にできた子を、混血児のように戯れている。▽こゝろ先生と私、
十二「奥さんは「本当いふと合の子なんですよ」と云つた。奥
さんの父親はたしか鳥取か何処かの出であるのに、御母さん
の方はまだ江戸といった時分の市ヶ谷で生れた女なので、奥
さんは冗談半分にさう云つたのである」②両方の性質を兼
ね持つ、中間的な存在。▽坑夫「其の茶店の前の往来へ、例
の祥天とどてらの合の子が出て、脂だらけの歯をあらはに曝
しながら顔に自分を呼んでゐる」

あいのちやうのけんぼう『愛の庁』の憲法』一三世

ああらーあいび

紀はじめに書かれた、アンドレ・ル・シャプランの“De Arte
Honeste Amadi.”第二巻の終りに“The Rules of Love”
として、格言風の三一箇条が掲げられ、鷹のとまり木につけ
られた羊皮紙に記されていたとあるから、おそらくこれに
拠つたのだらう。なおシャプランの記述は、チョーサー『薔
薇物語』の、愛の神の下僕となつた若者が、愛の法則を授か
る条に基づくものと思われる。▽幻影の盾「鷹の足を纏へる
細き金の鎖の端に結びつけたる羊皮紙を読めば、三十一ヶ条
の愛に関する法章であつた。所謂「愛の庁」の憲法とは是で
ある」

あいのつちやまあめがふる『間の土山雨が降る』近
松『丹波与作待夜の小室節』に引く馬子歌の一節。「間の土
山」は滋賀県甲賀郡の地名で、昔は東海道鈴鹿越えの要駅。
▽門十四「それは浄瑠璃の間の土山雨が降るとある有名な宿
の事であつた」

あいのり『相乗り』同じ乗り物に乗り合わせることに。
同乗。▽三四郎「女とは京都からの相乗である」

あいびあう『歩み合ふ』歩み寄る。折り合う。妥協す
る。譲歩する。▽坑夫「身体が動かないから、心も働かない
のか、心が居坐りだから、身体が怠けるのか、とにかく、双
方相ひ合つて、生死の間に彷徨してゐたと見えて、しばらく
は万事が不明瞭であつた」

アインザームカイト……『Einsamkeit, du meine Heimat Einsamkeit』ドイツ語。ニイチェ『ツァラツストラ』第三部 Die Heimkehr (帰郷) の冒頭に、'Oh Einsamkeit! Du meine Heimat Einsamkeit!' とある。この第三部は全体の精神を汲み、「永遠復帰」とか「永劫回帰」とか呼ばれ有名だが、「帰郷」はそのごく短い章で、引用の辞句は中ほど少し前に、もう一度くり返されている。▽行人 塵勞・三十六「其時私も兄さんの口を迸る Einsamkeit, du meine Heimat Einsamkeit! (孤独なるものよ、汝はわが住居なり)」といふ独逸語を聞きました」

あおきけんさく『青木健作』明治一六(一八八三)―昭和三九(一九六四)。のち井本氏。山口県生れ。明治四一年、東大哲学科(美学専攻)を卒業し、千葉県成田中学校教諭となり、鈴木三重吉と交わる。のち法政大学教授。著書に『青木健作短篇集』(昭和三、春陽堂発行)、『随筆権の実』(昭和一八、子文書房発行)などがある。朝日新聞は、大正三年に漱石の『心』を載せ終ったあとの小説欄を、諸作家の短篇集にしようとして企画し、一〇月一九日から二九日まで、青木の『梅雨の後』を載せる。▽長塚節氏の小説『土』『漸く手の隙いた頃を見計つて、読み落した諸家の短篇物を読んで行くうちに、無名の人の筆に成つたもので、名声のある大家の作と比べて遜色のないもの、或はある意味から云つて、却てそれ

よりも優れてゐると思はれるものが間々出て来た。さうして当時の評論を調べて見ると、是等の作物が全く問題になつて居ない。青木健作氏の『虹』は好例である」

あおきしげる『青木繁』明治一五(一八八二)―四四(一九二二)。久留米に生れ東京美術学校に学んだ洋画家。窮乏に耐え肺患に苦しみながら、明治画壇の浪漫的風潮の代表者となる。『それから』五で、「いつかの展覧会に青木と云ふ人が海の底に立つてゐる背の高い女を画いた。代助は多くの出品のうちで、あれ丈が好い氣持に出来てゐると思つた。つまり、自分もあゝ云ふ沈んだ落ち付いた情調に居りたかつたからである」と記しているのは明治四〇年に東京府勸業博覧会へ出品した、「わだつみのいるこの宮」をさす。明治四五年の一周忌記念遺作展覧会で、再びこの画に接し、「夫を仰ぎ見た時、いくら下から仰ぎ見ても恥づかしいといふ自覚があつた」(『文展と芸術』)と述べる。▽書簡 津田青楓宛、明治四五・三・一七「青木君の絵を久し振に見ましたあの人は天才と思ひます。あの室の中に立つて自から故人を惜いと思ふ氣が致しました」

あおんぞう『蒼ん蔵』。顔色が蒼白いのを擬人名化したもの。▽坑夫「すると其顔が非常な蒼ん蔵であつた」

あかいきつて『赤い切手』。封書などに貼る三錢切手のこと。明治三二年に発売され、菊の紋様を中心に駅鈴を配し